

## 「脳テキスト」としての〈羊〉：文学倫理学批評の 視点から見る『羊をめぐる冒険』

任, 潔  
中国・浙江大学外国言語文化と国際交流学院：副研究員

<https://doi.org/10.15017/4737370>

---

出版情報：九大日文. 38, pp.45-54, 2021-10-01. Association of Japanese Literature, Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：

# 「脳テキスト」としての〈羊〉

——文学倫理学批評の視点から  
見る『羊をめぐる冒険』——

任 潔

一、はじめに

『群像』一九八二年八月号に掲載された『羊をめぐる冒険』以下『羊』と略称)は、村上春樹の三作目にあたる長編小説である。

「青春三部作」<sup>(1)</sup>の完結編であり、村上が専業作家としての道を歩み始めた最初の作品でもある。この作品において、作者がデビューして以来、はじめて「世界の混沌性をべつの混沌性に置き換える」<sup>(2)</sup>というメタファー表現を使い、それによって自分なりの文体を発見したとされている。それに関する先行研究は肯定的な見解と否定的な見解に分かれ、澤田真紀は「単なることばあそびにすぎない」<sup>(3)</sup>と批評した一方、芳川泰久と西脇雅彦は(程度の差はあるにせよ)メタファー表現の役割に肯定的な姿勢を見せている。それらの肯定的な評価は、たとえば芳川が、比喩の多用が自然主義のつくりだした小説らしさとは別の小説言語の構築になっていると述べた<sup>(4)</sup>ように、多様で効果的なメタファー表現を用いることで、村上は「現実の混沌性を否定し、ただ一つを真実とすること」<sup>(5)</sup>という前世代小説家の創作観を

更新し得たと考えているのである。そのような評価を踏まえて、『羊』におけるメタファー表現が、作品の文体構造あるいは倫理的構造を支える重要な役割を果たしている可能性は十分にあると思われる。

『羊』は、「先生」と呼ばれる「右翼の大人物」の秘書に命じられて、「僕」が星形の斑紋を背中を持つ特殊な〈羊〉を探しはじめるという物語である。人間の脳にとりつく〈羊〉は、この作品での最も重要なメタファーとして、ストーリーを理解するための鍵とも言える存在である。この〈羊〉の象徴するものについて、先行研究は次のごとく、いくつかの観点を提起している。①モンゴルのな世界征服の権力<sup>(6)</sup>、②西欧近代の文化の力<sup>(7)</sup>、③日本近代の西歐化への意志<sup>(8)</sup>、④日本の近代そのもの<sup>(9)</sup>、

⑤一九六〇～一九七〇年代の思想や観念(たとえば全共闘時代の革命思想)<sup>(10)</sup>、⑥戦争と侵略の原動力<sup>(11)</sup>などである。諸先行研究が示しているように、「喩えられるもの」としての〈羊〉は、読み手の理解によつては異なる「喩えるもの」を持つようになり<sup>(12)</sup>、その多義性を保障したのは、「世界の混沌性をべつの混沌性に置き換える」とのメタファー表現にほかならない。そのため、作品の内容が曖昧になっており、山川健一が「雲のうえに書かれたお伽噺」とアイロニカルに感想を述べたのも無理はない<sup>(13)</sup>。本稿は、作品を読み解くキーワードとしての〈羊〉に注目し、この言葉の意味合いを考える上で、メタファー表現(「べつの混沌性」)によつて浮かび上がる作品の曖昧性・混沌性と作者の倫理的意図との関係を考察する。そこで、二十一世紀初

めに中国において提唱された「文学倫理学批評」の方法、特に「脳テキスト」(Brain text)理論を用いながら、作品におけるメタファー表現の有様について検討し、作品が創作された時代の倫理的価値や、今日の日本の倫理環境における倫理的価値を究明することにする。

## 二、文学倫理学批評とは何か

まず、本稿が用いる主要な方法論である文学倫理学批評について簡単に紹介する。

文学倫理学批評とは、倫理という視点から文学を分析・解釈・鑑賞し、文学の倫理的価値と教育的機能を発掘する批評方法である。「人類は倫理を表すために文字を作り出し、そしてそれを使って日常生活および人類自身が倫理に対する理解を記し、そこでテキストが生まれ、最初の文学が誕生したのだ」<sup>14)</sup>とあるように、時代・国別・ジャンルの如何を問わず、すべての文学は倫理的に読まれることが可能だと考えられている。倫理批評(倫理の視点から文学を分析する)の歴史は古代ギリシアにまで遡るが、一九六〇年代に入ると、民権運動、反戦運動、学生運動、女性解放運動や環境保護運動の高まりとともに倫理批評は最高潮を迎え、フェミニズム批評、新歴史主義批評、文化批評といった形で盛んに行われていた。特にアメリカの倫理批評は、ウエーン・C・ブース(Wayne Clayton Booth)の推進によってピークに達したが、一九九〇年代に入ると急速に衰えていっ

た。この衰退を、リチャード・アレン・ポズナー(Richard A. Posner)は、欧米における倫理批評は自分なりの術語と理論的特色がなく、方法論として文学倫理学から独立できなかったのだと説明している。<sup>15)</sup>

改革開放政策(一九七二年)開始以来、中国に輸入された文学理論は主に以下の三つである。①ロシアの形式主義批判、アメリカの新批評や構造主義批評といった、形式の価値を強調する形式批評、②文化と権利、文化とイデオロギーとの関係を中心とし、文化的視点から文学を研究する文化批評、③フェミニズム批評、環境批評、新歴史主義批評、ポストコロニアル批評といった、政治・社会の視点から展開される文学批評である。上記の文学批評は、政治・道徳・性別・種族の角度に基づく広義的倫理批評から出発したのだが、結局それぞれの出発点、つまり形式・文化・性別・環境の諸問題に行き戻り、倫理から次第に遠くなっていく。そうした状況のなかで、中国での文学批評も徐々に文学から離れ、理論コンプレックス(Theoretical Complex)、命題コンプレックス(Predicated Complex)、術語コンプレックス(Term Complex)の傾向が著しくなる。また、「芸術のための芸術」という文学観の影響で、倫理的価値よりも文学作品における美的価値が、さらには(市場経済の影響で)倫理的価値や美的価値よりも文学作品の商品としての価値が重視されるようになる。文学に対する批評は、読者の好みに合わせるもの、社会に対する責任感の薄いものになっていく観を呈する。

このような背景下、文学倫理学批評は、二〇〇四年一〇月、

中国の文学研究誌『外国文学研究』に掲載された聶珍釗の論文で提唱された<sup>(6)</sup>。その後、約十年の間に著しい発展を遂げ、二〇一四年三月、中国国家社会基金の支援を受けて出版された。

文学倫理学批評は、文学テキストを批評の対象とし、倫理的な角度から作品における人間と自分／人間と社会／人間と自然との関係を把握する理論である。特定の倫理環境における各個人の倫理選択を分析して、特定の基準に従って倫理的判断を下すことで、作品の倫理的価値を発掘し、小説を新たな読み方で照射することを試みるものである。単に倫理的な視点から文学を批評する従来の倫理批評にとどまらず、自分なりの術語と理論の特色をもって、文学研究の根本的問題を解決するというのは、文学倫理学批評の主な主張である。次節で用いる脳テキスト理論は、文学倫理学批評でも特に重要な理論の一つである。

### 三、テキストとメタファー理解・メタファー理解生成

脳テキストは、文字や紙が生まれる前に人間が情報を保存するテキストの一種類である。一種の特殊な生物形態であり、記憶の形で保存されている世界万物に対する人間の感知・認知・理解および思考などを指す。脳テキストは、まず脳概念 (*brain concepts*) の形で脳に保存されると言われている。脳概念は「シニフィエ脳概念」と「シニフィアン脳概念」の二種類を含み、「シニフィエ脳概念」はあらゆる事物とあらゆる概念を指すもので、「シニフィアン脳概念」は特定の事物や概念を指すもの

である。<sup>(7)</sup> この脳概念の理論を援用して考えると、『羊』の〈羊〉は、特定の事物や特定の概念（たとえば北海道地区の家畜を指す場合は「シニフィアン脳概念」になるが、メタファー表現として使われる場合は「シニフィエ脳概念」になる。さらに、「シニフィエ脳概念」と「シニフィアン脳概念」とを組み合わせると「思考すること」になり、その結果として「思想」が形成され、「思想」が脳に保存されることで脳テキストになる<sup>(8)</sup>。そして受信者 (*addressee* / 読者など) は、「シニフィエ脳概念」と「シニフィアン脳概念」との対応関係を発見することによって、メタファーを理解する。その過程には、次にまとめられるように、三つの特徴がある。

1 「シニフィエ脳概念」と「シニフィアン脳概念」との組み合わせ状態は倫理環境 (*ethical context*)<sup>(9)</sup> によって決められる。異なるメタファーの意味形成は、受信者の選択した「倫理環境」によって決定されるということである。ここでの「倫理環境」は、「テキスト内部の倫理的文脈」(イ)か、「テキストの外部にいる発信者 (*addresser* / 作者など) が置かれている／置かれていた倫理的文脈」(ロ)、または「テキストの外部にいる受信者が置かれている、あるいは意図的に設定される倫理的文脈」(ハ)を含むものと考えられている。『羊』で言うと、たとえば〈羊〉が「モンゴルのな権力意味を象徴する」という観点は、十三世紀元朝の軍隊が二度日本を襲撃したという倫理的文脈に立脚したものの(一)であり、「全共闘時代の革命思想を象徴する」という観点は、学生運動が盛んに行われていた一九六〇〜一九七

○年代の倫理的文脈に立っているもの(Ⅱロ)であろう。そして「西欧近代の文化の力を象徴する」という観点は、言うまでもなく、室町幕府後期より影響の見られる西洋文化を考慮した倫理的文脈によるもの(Ⅱハ)である。異なるメタファーの意味形成は、言語学理論の範囲で理解されることが多く、受信者の経験、思考回路および脳の発達程度が意味形成の過程に関わるものと考えられるのが一般的だが、それはケーススタディにしか適用できないのではないかとと思われる。異なる経験や思考回路を持つていて、脳の発達程度の異なる人々が、なぜ特定のメタファー表現に対して、同じような理解に至ることができるのかという問題は、言語学の理論では説明できないからである。異なるメタファーが同じ意味形成につながる事が可能なのは、人々が同じ倫理環境(倫理的文脈)を有することで、同じ理解の仕方に到達できるからだとして理解すべきではないだろうか。

2 受信者がどのような倫理環境を選定するかは、受信者自身の脳テキストによつて決定される。人間は生まれるときから「シニフイエ脳概念」と「シニフイアン脳概念」との組み合わせを始め、脳テキストを得ようとする。脳テキストは人の思想や行動を決定する既定のプログラムのようなものであるから<sup>(21)</sup>、受信者はまさにこの脳テキストを通して、倫理環境を選択しメタファーを理解するのである。認知言語学の理解では、メタファーの本質はある事物(A)を通して別の事物(B)を理解・経験するということであり、この時、BはAのカテゴリリー

にあつてAの表象でもある。BはAという概念の内包あるいは外延の中にあるから、Aを理解するためのBには、一定の条件と制限があると考えられている<sup>(22)</sup>。文学倫理学批評はこうしたBの有限性を認めるが、その有限性が「BはAのカテゴリリー」にあるからではなくて、一定の時間内における受信者の脳テキストそのものの持つ有限性にあるのだとされている。更に、脳概念の獲得に従い、受容者の脳テキストも変化していくため、もし受信者や時間の制限を考慮しないなら、Bは無限に近づき得るものと理解できるであろう。

3 メタファー理解の基本的な目的は、思想や行為を正しく指導できる脳テキストを獲得することにある。一九八〇年代George Lakoffが提出した「概念メタファー」(Conceptual metaphor)理論によると、メタファーは人間の認知と存在の根幹を支えるものだと言われているが、文学倫理学批評の考えでは、メタファーを通して認知を実現することはできるが、認知はメタファー理解の最終目的ではないのだ。メタファー理解の最終目的は、脳テキストを獲得することである。具体的に言えば、自然的選択によつて人間の形を得た後、人間が直面しなければならぬ最大の問題は、人間の本质をいかに「倫理選択」<sup>(24)</sup>することで獲得できるかということにある。脳テキストは人間の生き方や存在の仕方を決定するものであるため、人間は己の本質を手に入れようとするなら、正しい脳テキストを獲得する必要がある。この脳テキストの獲得にあたり、人間は脳に入力された情報を抽象化・概念化することで脳概念を獲得し、「シニフイ

「脳概念」と「シニファイアン脳概念」とを組み合わせてメタファーを理解するだけでなく、既存した脳テキストに対して有益な補完を与えたり、間違っただころを修正したりもするという過程を経過しなければならぬ。こうして、受信者のメタファー理解は常に、思想や行動を導く正しい脳テキストを得ようとして働いているのである。

受信者は既存した脳テキストに基づき、異なる倫理的文脈を設置して「シニファイ脳概念」と「シニファイアン脳概念」とを組み合わせる。そして脳テキストを更新し、倫理選択の段階を完了させ、人間の本質を獲得しようとすることは、これまでの説明通りである。次は、そうした脳の働きの過程におけるメタファーの生成プロセスについて、脳テキスト理論を用いながら簡単に説明する。

メタファーは発信者（＝作者）の脳テキストに由来し、発信者の脳テキストを文学的に表現されたものである。発信者が感知・認識・理解などの思考過程を通して、脳に保存されている脳テキストと脳概念を文学的な倫理規則に従って再結合させ、新しい脳テキストすなわち文学的な脳テキストに編集・加工する<sup>(25)</sup>。その文学的な脳テキストは記憶の形で脳に保存され、言葉や文字の形をとって表現される。それが文学の創作過程である。村上が自分の創作について語った回想はこの文学の創作過程を彷彿とさせ、たとえば彼は次のように、創作を脳の「抽斗」から「記憶」を取り出す行動に喩えている。

とにかく我々の——というか少なくとも僕の——頭の中にはそういう大きなキャビネットが備えつけられています。そのひとつひとつの抽斗を開け、中にあるマテリアルを取り出し、それを物語の一部として使用します。<sup>(26)</sup>

他にも、彼は「良きメタファー」を創作のための「ツール」として語ったことがあり、そのような「ツール」は、作者自身の脳テキストを表すための「より強くカラフルな」<sup>(28)</sup>方式であるというふう理解できる。要するに、文学的修辞法としてのメタファーは脳テキストから由来し、発信者が言語や文字などのツールを利用したり、一定のメタファー法則に従ったりして、脳テキストを文学的に表現するという方法である。

更に、文学の基本的機能は教誨することである<sup>(29)</sup>という文学倫理学批評の見解から、修辞法としてのメタファーの基本的機能も教誨することにあるということになる。そうすると、メタファー生成の基本的原則と根本的的目的是、受信者に正しい脳テキストすなわち「人の思想や行動を決定する既定のプログラム」<sup>(30)</sup>を伝えることであるということが出来る。このような文学の機能について、たとえば村上は自分の創作を振り返るとき、以下のように述べている。

歴史的に見ていけばわかることだが、文学は多くの場合、現実的な役には立たなかった。そういう意味では文学は無力であるともいえる。歴史的な即効性はほとんどない。で

も少なくとも文学は、戦争や虐殺や詐欺や偏見を生み出しはしなかった。逆にそれらに対抗する何かを生み出そうと、文学は飽くこともなく営々と努力を積み重ねてきたのだ。<sup>(31)</sup>

そのような倫理的意図に立ちながら、村上は四十年以上以上わたって創作し続け、語り方と文体の革新をいつも試みてきたと言える。たとえば『羊』において、村上春樹はメタファーを設置し、多義的な〈羊〉を脳テキストを伝達する運び手にして、「それらに対抗する何かを生み出そう」とした。彼は「その羊にどんな意味があるのかが分からない」と明言する一方、「そういう面倒なことをやって、一体何の意味があるのだ」と質問されたとき、また「そこにはたしかに何かがあるような気がするんです」とも打ち明けている<sup>(32)</sup>。そこで、「そういう面倒なことをやって」多義的な〈羊〉のメタファーを設置し、主人公の「僕」を探求の旅に行かせた村上の意図を探ることが、次に行われるべき作業となるだろう。

## 五、開放性と合理性を兼ね備えた脳テキストとしての〈羊〉

以上述べたように、受信者は既成の脳テキストによって倫理環境を選定し、そして「シニフィエ脳概念」と「シニフィアン脳概念」との組み合わせ状態に従って、思想や行為などを正しく指導できる脳テキストを獲得する。一方、発信者は言語や文字などのツールを利用し、様々なメタファーを設置することで、

文学的方法で受信者に正しい脳テキストを伝え、文学の教誨機能を実現しようとする。そのような枠組みの中で、メタファーとしての〈羊〉の意味を捉えてみれば、村上の伝えようとした脳テキストには二つの特徴、つまり開放性と合理性があることがわかる。この両者は、ほかでもなく正しい脳テキストの備えるべき基本的特徴そのものである。

まずは開放性から考察する。開放的脳テキストとは、より多くの「シニフィエ脳概念」と「シニフィアン脳概念」との組み合わせを実現できる脳テキストである。これの対概念である閉鎖的脳テキストとは、ある「シニフィエ脳概念」を特定の「シニフィアン脳概念」としか組み合わせられない脳テキストである。たとえば次のインタビューからは、村上が創作を行うとき、そうした脳テキストの作用を受けていたことが窺われる。

冷戦時代には東西という二つのシステムの戦いでしたよね。それが、今では異種のシステムとシステムとの戦いみたいになつていてという気がするんです。それは何かというと、オープン（開放）システムとクローズド（閉鎖）システムの戦いです。オウム真理教というのは完全にクローズドシステムで、外なる社会というのはオープンシステムですね。<sup>(33)</sup>

クローズドシステムは閉鎖的物語（＝閉鎖的脳テキスト）しか提供できない。村上の言葉を借りれば、閉鎖的物語は「シンプ

ルで、直接的で、明快な力を持った強力」なものであるから、「そこではすべての疑問は解かれている」<sup>(36)</sup>ように見える。

閉鎖的脳テキストが稼働するとき、「シニファイ脳概念」と「シニファイアン脳概念」の間に特定の組み合わせ方しか存在せず、多元的な現実世界における制約、条件、矛盾などを考えなくても明確な答えを得ることができる。つまり、「ある場合には（中略）非常にうまく機能している部分もある」クロードシステムには「矛盾が含まれ」ており、「機能不全なものが見られ」<sup>(37)</sup>るのである。閉鎖的脳テキストの有効性がそれ自身の閉鎖性によつて生じ、その有効性もまた単一的な思考パターンや行動様式しかもたらず、多様化していく外部世界に適応できないといういった思考や行動が、「悲惨きわまりない結果をもたらすこと」<sup>(38)</sup>——一九九五年の地下鉄サリン事件がまさにその一例である——になるのは言うまでもない。実は、事件の発生した十数年前から、村上はすでにこうした時代の病を敏感に捉えていたのである。『風の歌を聴け』『1973年のピンボール』などに見られるような、閉鎖的自我への配慮を捨て、より広い社会歴史空間に目を向けようとする志向性が、彼の鋭い嗅覚を覗かせている。『羊』に眼を転ずると、「人間と人間の世界を一変させてしまうような巨大な計画」を持つ、「完全にアナキーな觀念の王国」<sup>(39)</sup>を作るといういささか曖昧な目的が示しているように、村上は〈羊〉というメタファーを設けることで、日本の近現代史全体をつなぎとめようとしている。彼は相対的に明確な意味を限定する語り方によつて、読者にメタファーの意味を

探せるように誘導し、読者に開放的脳テキストを提供しているのである。

次は合理性について考える。合理的な脳テキストとは、人間を理性的にコントロールし、正しい「倫理選択」をさせる脳テキストである。その過程において、人間は既存の脳テキストを守ると同時に、理性の作用を発揮し、外来の脳テキストを合理的に選択し吸収する。<sup>(40)</sup>『羊』の中では、「倫理選択」をしなればならない人物が、「羊博士」「先生」「鼠」の三人である。「人間と人間の世界を一変させてしまうような巨大な計画」(二四二頁)を持つ〈羊〉に侵入されて、彼らは既成した脳テキスト(人間の脳)と外来の脳テキスト(羊の脳)とのいずれかを選ばなければならぬ境地に陥った。「羊博士」は〈羊〉が「あらゆるものを呑みこむるつば」(三五五頁)のようなもの、宿主に無限の力、権力、財富を与えることができるものとして描いているが、羊の脳ははたしてどのようなものなのだろうか。〈羊〉が二番目の宿主である「先生」の脳疾患を緩和しただけでなく、「先生」を凡庸な右翼から右翼の首領へと上らせ、国全体を支配できるほどの強大な地下王国を築かせたことを見れば、羊の脳は人間の脳より優れたもののように見える。だが、「先生」が成功を遂げた手段を考えると、中国で無茶をして巨万の富を手に入れたことにせよ、米軍を買収して軍事裁判を回避しようとして、政党買収で国の政治と経済をコントロールすることにせよ、いずれも非理性的な行動であると言える。「先生」を支配していた〈羊〉は非理性的な〈羊〉であり、宿主に非理性的



な羊の脳、すなわち非理性的な脳テキストしか提供できないものである。

人間の脳と羊の脳に直面するとき、「羊博士」「先生」「鼠」はそれぞれ異なる選択をした。「羊博士」は〈羊〉の最初の宿主でありながら、〈羊〉が体内に入ることになつたく気づいていなかったため、何の選択もできなかった。もちろんこの「選択できなかった」というのも一種の選択だと言えるし、選択するのにあたって、自分の中に十分な倫理意識を持つことを選択しなかつた結果だと考えられるからである。彼は既存の脳テキストや自我の本質に対する保護意識が欠如している人たちの代表であり、〈羊〉に利用された後になつてはじめて、「もつと早くそれを気づくべきだった」(二四三頁)ことに気づいた。〈羊〉の二番目の宿主は「先生」であり、権利と富を追求するため、彼は既存の脳テキストを捨てて、外来の脳テキストを受け入れることを選んだ。〈羊〉に宿主として選ばれたのが彼の本意ではなかつたにもかかわらず、〈羊〉が体内に入ったことを知つた後、「先生」は〈羊〉の制御に抵抗するどころか、かえつて〈羊〉から与えられた羊の脳を喜んで受け入れ、一連の非理性的な行為による誤つた倫理的選択を行うことにした。そして、〈羊〉の三番目の宿主である「鼠」は、「羊博士」とも「先生」とも異なる行動を示し、積極的に抵抗して人間の脳を守ろうとしていた。彼の取つた方法(自殺)は悲劇的なものであるが、羊を殺すことによつて彼は自分の脳テキストを守り、正しい倫理的選択をしたと言える。以上からわかるように、村上は「羊

博士」「先生」「鼠」の選択を通して、合理的な脳テキストを読者に提供している。つまり、人間は既存の脳テキストを守ることを前提にし、理性を発揮して外来の脳テキストを合理的に選択・吸収することで、自分の脳テキストをより合理的なものにすべきだという志向性である。

## 六、おわりに

村上は、メタファーを修辭法として文体の革新に応用しただけにとどまらず、思考の方法としても小説の倫理的構造に浸透させていると思われる。〈羊〉のメタファーという語り方のもとに、開放的物語をもつて閉鎖的物語に対抗しようとする村上の姿勢が、『羊』から見出すことができる。主人公の旅は、開放的システムの影響下に置かれる創作の道、そして人間の生きる道を探求する旅でもあり、この過程において、文学倫理学批評の脳テキスト理論は非常に重要な示唆を与えてくれる。メタファー理解と生成の倫理的メカニズムだけでなく、メタファーの教誨機能を強調した一面を、『羊』は有しているのである。メタファーを言語の問題ではなく、「思考」の問題と理解する見解もあるが<sup>(4)</sup>、メタファーは「思考」の問題だけでなく、脳テキストと「倫理選択」に係る問題でもあるのではないかと思われる。

【注記】

- 1 村上春樹のデビュー作『風の歌を聴け』（一九七九年七月）から始まり、『1973年のピンボール』（一九八〇年六月）『羊をめぐる冒険』（一九八二年八月）までの初期三部作を指す。
- 2 村上は、現代の一小説家として「今の小説が社会において果たしている役割は（あるいは果たすことを求められている役割は）、僕らが置かれている世界の混沌性を鋭く振り払うことではなく、それをどのように有機的に相対化するか」ということと、「そこにある混沌性をべつの混沌性に置き換えていくこと」を自分の仕事内容としていると語っている。まさしく比喩的な表現ではないかと思われる。（村上春樹『少年カフカ』新潮社、二〇〇三年六月、七三四～七六六頁）
- 3 澤田真紀「村上春樹の比喩表現の研究」『日本文学』99、二〇〇三年三月、六七頁
- 4 芳川泰久、西脇雅彦『村上春樹 読める比喩事典』ミネルヴァ書房、二〇一三年九月、二頁
- 5 松川美紀枝「現代における比喩の構造とその効果——村上春樹『海辺のカフカ』における直喩表現に着目して——」『尾道大学日本文学論叢』2、二〇〇六年十二月、一二五頁
- 6 川村二郎「羊をめぐる冒険」『群像日本の作家26 村上春樹』小学館、一九九七年、一六三～一六五頁
- 7 関井光男「羊」はどこへ消えたか（中上健次と村上春樹——都市と反都市（特集））『國文学 解釈と教材の研究』30（3）、一九八五年三月、二一〇～二二五頁
- 8 前掲注7に同じ
- 9 今井清人『羊をめぐる冒険』——ミメシスされる〈物語〉——『村上春樹——OFFFの感覚』国研出版、一九九〇年、一六五～二〇二頁
- 10 遠藤伸治「村上春樹試論——主体性のサブイタル」『近代文学試論』27、一九八九年十二月、五三～六七頁
- 11 柴田勝二「受動的な冒険——『羊をめぐる冒険』と〈漱石〉の影——」『東京外国語大学論集』74、二〇〇七年六月、一四一～一六一頁
- 12 中国における従来のメタファー研究では、メタファーを分析する際に、修辭学で用いられている「本体」（喩えられるもの）や「喩体」（喩えるもの）といった用語を採用していた。
- 13 村上春樹研究会編『村上春樹 作品研究事典』鼎書房、二〇〇一年六月、一八四頁
- 14 轟珍釗『文学倫理学批評導論』北京大学出版社、二〇一四年、一三頁
- 15 Richard A. Posner, *Against Ethical Criticism: Part Two (Philosophy and Literature 22.2, 1998)*:403
- 16 轟珍釗「文学倫理学批評…文学の基本的機能と核心的価値」『外国文学研究』二〇〇四年八月、八～一三頁
- 17 轟珍釗「文学倫理学批評…口頭文学と脳テキスト」『外国文学研究』二〇一三年六月、八～一五頁
- 18 轟珍釗「脳テキストと脳概念の形成メカニズムと文学倫理学批評」『外国文学研究』二〇一七年十月、三三頁
- 19 前掲注14に同じ、二五六～二七〇頁
- 20 前掲注18に同じ
- 21 前掲注18に同じ
- 22 徐盛桓「喩えられるもの」と「喩えるもの」の類似性——分形論の視

- 点から見るメタファー研究その二』『当代修辭学』二〇二〇年四月、二二頁
- 23 マーク・ジョンソン、ジョージ・レーコフ原著、何文忠訳『メタファーに満ちた日常世界』浙江大学出版社、二〇二〇年五月、四〇六頁
- 24 生物的選択は、人間を動物から完全に区別することができない。人間を動物から本当に分離させたのは倫理的選択である。人間の生物的選択と倫理的選択は、異なった本質を持つ二種類の選択であり、前者は人間の形式を選択するものだが、後者は人間の本質を選択するものである。善悪という概念は倫理観と同時に現れ、善悪を分け得るかどうかというのは、人間であるかどうかを判断する基準であり、人間の倫理の基礎でもある。(黃珍釗『文学倫理学批評導論』北京大学出版社、二〇一四年)
- 25 前掲注18に同じ、三〇頁
- 26 村上春樹『職業としての小説家』スイッチパブリッシング、二〇一五年、一一七頁
- 27 村上春樹『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです』村上春樹インタビュ―集1997-2009』文芸春秋、二〇一〇年、二一〇頁
- 28 前掲注27に同じ、一八一頁
- 29 前掲注14に同じ、一四頁
- 30 前掲注18に同じ
- 31 村上春樹『村上春樹雑文集』新潮社、二〇一一年、一八頁
- 32 前掲注31に同じ
- 33 ジェイ・ルービン原著、馮濤訳『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』南京大学出版社、二〇一二年、七七頁
- 34 前掲注32に同じ、二七頁
- 35 前掲注27に同じ、一二七頁
- 36 前掲注31に同じ
- 37 前掲注27に同じ
- 38 前掲注31に同じ、二六頁
- 39 『村上春樹全作品1979-1989』② 羊をめぐる冒険』講談社、二〇〇三年三月、二四二-三五六頁。初出『羊をめぐる冒険』講談社、一九八二年八月号。以下同じ
- 40 拙稿『脳テキストと『僕』の存在と選択——村上春樹『世界の終わり』とハードボイルドワンダーランド』『新論』『文学学際研究』二〇一七年九月、四七-六三頁
- 41 See Lakoff, George and Mark Johnson, *Metaphors We Live by* (Chicago: Chicago University Press, 1980) 206-207
- 【付記】本論文は、中国国家社会科学基金重大项目「当代西方倫理批評文献の整理、翻訳と研究」(No.19ZDA292)の助成によるものである。また、本稿における英文および中国語文献の翻訳は、すべて引用者による。
- (中国・浙江大学外国言語文化と国際交流学院副研究員)